

かだ 華佗の〈治療世界〉: そうそう 曹操とのコントラスト

角屋 明彦

Hua Tuo, His System of Healing : A Contrast with Cao Cao

KADOYA, Akihiko

Abstract

In order to examine the healing system of Hua Tuo(華佗), I compare it with the political system of Cao Cao(曹操). The Chinese character *zhi*(治) originally means “trying to arrange the changing chaos”. To Hua Tuo, *zhi* means “trying to arrange the *Qi*(氣) in human body” i.e. “to cure”. To Cao Cao, *zhi* means “trying to arrange the political chaos in society” i.e. “to govern”. Furthermore, these two differing systems had contact through the medium of a disease. This contact gave eternal life to the healing system of Hua Tuo and gave another new disease to the political system of Cao Cao.

要 約

後漢末から三国時代初期にかけての中国には名医・華佗がいた。彼が構築しようとした〈治療世界〉を考察するに際して、曹操の〈政治世界〉との対照を試みる。「流動する混沌に働きかけてととのえる」という原義を持つ「治」なる漢字が、華佗の〈治療世界〉では人体内部の〈気〉の流れに働きかけて「ととのえる」=「なおす」ものであり、曹操の〈政治世界〉では社会に働きかけて「ととのえる」=「おさめる」ものであった。さらには、この〈治療世界〉と〈政治世界〉が〈病〉を介して接触したことが双方に決定的な影響を与え、前者は永遠の生命を有すことに、後者は新たな〈病〉を孕むことになっていった。

キーワード

対照 (contrast)

華佗 (Hua Tuo)

〈治療世界〉 (healing system)

曹操 (Cao Cao)
 〈政治世界〉 (political system)

はじめに

後漢末から三国時代初期にかけての中国には華佗という名^{あざな}の名医がいた。彼の字は元化、一名を冑^{あひ}と言^いい、現在の安徽省毫^{あんき}県^{はく}にあたる沛^{はい}国^{しゅう}の譙^{しやう}の出身であり、その伝は『後漢書』方術伝、及び『三国志』魏書にある。

前・後併せて四〇〇年間続いた漢王朝の政治は、宦官と外戚の専横によって腐敗し、漸く末期を迎えようとしていた。疫病の蔓延するなかに農民主体の民間信仰集団・黄巾の党による反乱が世相の混乱に拍車をかけ、諸豪族はその機に乗じて自身の勢力拡張を画策していた。そうした時代にあつて、華佗は各地を遍歴して研鑽を積み、やがて名医、はては神医とまで呼ばれるようになっていった。彼の業績の最たるものを二つ挙げるとすれば、それは「五禽戯」と「麻沸散」であろう。「五禽戯」とは体操術である。虎・鹿・熊・猿・鳥の五種類の動物の形態を模写したもので、華佗はこれを創り上げ、自らも実践し、また弟子や患者にも教えたと言われている。「麻沸散」とは華佗が創製した全身麻酔薬である。彼はこれを患者に投与して切開手術を行なつたとされている。しかし、その処方構成・使用方法などの記録が残っていないために医学史の世界では信憑性が揺れている。

この華佗が構築しつづつあつた〈治療世界〉を考察する手段として、同時代を生きたもう一人の人物・曹操と対照してみようと思う。⁽¹⁾ 曹操 (155～220) は「乱世の奸雄」⁽²⁾ としてあまりにも有名である。宦官・曹騰^{そうとう}の養子となつて勢力を持った夏侯嵩^{かこうすう} (改姓して曹嵩) の子として生まれ、父・曹嵩の威光で漢王朝の軍人として台頭した。そして黄巾の乱の平定に活躍し、献帝を擁して実権を掌握していった。魏王に封じられ、帝位を奪おうとの野心を見せたが、赤壁の戦いで呉の孫権と蜀の劉備の連合軍に敗退し、魏・呉・蜀の三国鼎立となつてゆく。周知のくんだりである。この曹操もまた沛国譙の出身なのである。一方、華佗の正確な生年については不明であるが、彼らが時間的にも空間的にもほぼ同じスタートを切つたということは間違いない。

前章 二つの〈治〉

従来、華佗については主として医療の領域で、曹操については主に政治の分野でさまざまに論じられてきた。本論文では、華佗と曹操、両者の関係が見える視座を摸索する。手始めに「治」という文字に注目したい。文字右上の「ム」の部分は先の曲がつた棒。右下の「口」が表す物に作用を施す形。左の「氵」が水を表すので、「治」全体で「道具を使って人為を加え、流れを良くする」という意味があるとされている。⁽³⁾ この「治」という漢字は日本語の訓読みでは「なおす」とも読めば、「おさめる」とも読む。「なおす」から派生した言葉には、「治癒」「治療」「完治」「不治」など医療に関わるものが多い。他方、「おさめる」から派生した言葉には、「治安」

「治政」「自治」「統治」など政治に結びつくものが多い。漢民族は約五万種類の文字記号、即ち漢字を創った。そのなかの一つの漢字が医療と政治の両面性を持っていることになる。ここに中国の医療あるいは政治、ひいては文化を読み解く鍵がある、と言ってよいのかも知れない。ともあれ、「なおす」でもあり、「おさめる」でもあるこの字の根源の意味が「人が働きかけて流れをととのえる」ということを踏まえ、以下では〈治〉をめぐる華佗と曹操の対比を試みる。

中国医学の歴史は数千年前に遡ることができる。⁽⁴⁾ 黎明期はシャーマンによる呪術医療＝「醫」の色彩が濃かった。その後、治療経験の蓄積と病気機序の考究によって、医学は急速の進展を遂げ、〈経穴〉〈経絡〉などの概念を駆使して理論が整備され、やがて鍼灸療法と薬物療法が一体化した総合医療＝「醫」が形成されていった。その時期を中国医学の形成期ととらえれば、およそ漢王朝がそれにあたり、華佗はこの漢王朝末期に位置する。

万物は〈気〉によってできているとの「〈気〉の思想」が徐々に形成され、医学の理論を補強してゆくと、人体そのものも〈気〉で造られているのはもとより、その流路が〈経絡〉であって、その流れのそこかしこに存在し、流れを調整する作用点が〈経穴〉である、となれば、人体内部の〈気〉の流通不全がとりもなおさず〈病〉^{やまい}ということになる。治療師たちはそうした考えにもとづいて診断と治療の技術鍛錬に取り組む。その一人が華佗であったのである。

華佗の生年は正史である『後漢書』にも『三国志』にも明記されていないが、誕生地は沛国譙と書かれている。中国大陸全体から見れば太平洋に近い東部に位置するこの地は、現在は安徽省に属している。彼の家系が代々どんな生業に就いていたのか不明であるが、青年時代の華佗は主に徐州の地に学んだ。⁽⁵⁾ そして各地を遍歴してさまざまな知識や技術を学ぶなか、治療師として名を成していったのである。沛国の相（行政長官）・陳珪が孝廉（地方から学問や徳行の優れた人物を中央に官吏として推薦する制度）に推挙したり、太尉（三公のひとりで、軍事を管理する官僚）・黄琬が招聘することもあったが、それらすべてを断り、政界との関係を避けて医業に励んだ。正史の記すところである。

治療師・華佗にとって、人体内部の〈気〉の流れに働きかけて「ととのえる」ことが課題であった。社会全体から見れば極めて小さい存在ではあるが、その構成の基本単位である人間の身体に働きかけて〈気〉の流れを「ととのえる」。つまりは「なおす」。そこに生涯を賭けたのである。それが〈治療世界〉を構築しようとする華佗の真の姿であったと言えよう。

曹操のイメージは、元末明初の羅貫中^{らかんちゆう}が書いた歴史小説『三国志演義』によって民間に定着した。「乱世の奸雄」つまり漢王朝を篡奪した逆臣というように人々に受けとめられている。しかし『三国志演義』はもちろん正史に拠ってはいるが、民間の講談や芝居などを加味して史実と虚構をなまぜにした小説であって、作者による潤色が濃い。正史の描くところによって描き直せば、濁流（宦官の家系）ではあるが経済的に裕福な曹家に生まれた彼は、暗愚な霊帝を取り巻く中央政府の腐敗への憤懣、清流官僚への反発などもあり、自由奔放でかつ任侠放蕩の青年時代を過ごしたようである。その一方で、兵法書『孫子』に注をつけるなど学究肌な面もあり、また、楽府形式の詩を多く詠む詩人でもあった。

当時、王朝政府の弱体化は社会のいたるところにその綻びが出ていた。その最も甚だしいもの

が黄巾の乱であった。疫病が拡がるなかにあつて病気なおしの祈祷に端を發し、民間信仰の太平道を主唱する張角は貧窮する膨大な数の農民を吸収して挙兵した。そして反乱は反政府的な土豪と結びついて手の付けられないほど大規模化した。曹操は王朝の軍部に騎都尉として所属し、暴動鎮圧に活躍した。一時、済南の相となった曹操は、政界と賄賂によって結託する淫祠邪教を肅正するなどの政策を断行した。この時代としては出色の、決断力と実行力のある政治家であった。

その後、鎮圧されたとは言え、黄巾の残党は各地に燻り、東北の異民族・烏桓の進出などもあつて、後漢王朝の権威は地に墜ちていた。中央では靈帝廢帝の動きもあつたが、これは事前に發覚して瓦解した。189年の靈帝病没の後、太尉・何進は宦官一掃・人事刷新をめざしたが、曹操はこれからも距離を置き、何進の後に台頭した董卓の専横政権からの誘いも断った。190年、この董卓打倒の動きが起ると、曹操はこれに呼応し、各地に偽の勅令を發して挙兵を促し、次第に勢力の中枢に入るにつれて、その軍事力は強大なものとなつていった。192年に董卓が部下に謀殺されると、曹操は政敵の袁紹と対立しながらも、獻帝を奉じて許に都を構え、司隸校尉（警視總監）・録尚書事（行政長官）・大將軍を一身に兼ね、政治権力を整えていった。そして天下覇業の志を抱くようになっていったのである。

曹操の生きた時代は混沌錯綜していた。そうしたなかにあつて、彼は彼なりの人生を描こうとした。その功罪の評価はさておくとしても、決断と実行の積み重ねによって当時の社会の停滞と腐敗に流れをつくり、悪しきものを流し捨て、良きものを注ぎ込もうとした。換言すれば、社会という巨大なものに働きかけて「ととのえる」、つまりは「おさめる」。そこに文字通り命を張り、独自の〈政治世界〉を創り出そうとしたのであつた。

後章 二つの〈治〉の接触

後漢末期から三国時代初期にかけての混沌に生まれ合わせ、華佗は人体内部の〈氣〉の流れに働きかけて「ととのえる」=〈なおよす〉ことを試みた。曹操は社会に働きかけて政治上の流通不全を改善すべく「ととのえる」=〈おさめる〉ことに挑んだ。前者にとっての〈治〉とは〈治療世界〉の構築であり、後者にとっての〈治〉とは〈政治世界〉の創造であつた。そしてこの異質な二つが接触したのである。

まず、華佗と曹操のかかわりが正史のなかでどのように描写されているかを見てみよう。最初は『後漢書』である。前漢・司馬遷の『史記』はそれまでの歴史記録から歴史物語へと史書の体様を一新した。所謂、紀伝体への記述形態の変革である。このことは後に続く歴史家たちを啓発し、後漢・班固は前漢王朝の歴史を『漢書』にまとめた。続く後漢王朝についての史書としては、官撰の『東觀漢記』、三国時代に入って呉・謝承の『後漢書』、呉・薛瑩の『後漢紀』ほか同種の書名で数多くのものが世に出たが⁽⁶⁾、正史の流れは六朝・宋・范曄の『後漢書』に辿り着く。その『後漢書』のなかから華佗と曹操の関係が描写されている箇所を並べてみる。

『後漢書』卷72・方術伝⁽⁷⁾

①曹操聞きて佗を召し常に左右に在り。操積しく頭風眩に苦しむ。佗鍼するに手に隨ひて差ゆ。

②人と爲り性として意を得難きを悪み、且つ醫を以て業とせらるるを恥づ。又家を去りたれば歸らんと思ふ。乃ち操に就き還り方を取らんことを求め、因りて妻の疾に託して數期反らず。操書を累ねて之を呼び、又郡縣に勅して發遣せしむ。佗能を恃み事を厭ひ、猶ほ至ることを肯ぜず。操大いに怒り人をして之を廉せしむ。妻の詐疾なるを知るや、乃ち収へて獄訊に付し、考驗するに首服す。荀彧請ひて曰く、佗の方術實に工なり。人命の懸る所なり。宜しく全宥を加ふべしと。操従はず。竟に之を殺す。佗死に臨み一卷の書を出だし、獄吏に與へて曰く、此れ以て人を活かすべしと。吏法を畏れ敢へて受けず。佗強ひて與へず、火を索め、之を焼く。

次に西晋・陳寿の手に成る『三国志』の中の魏書である。初め蜀に仕えて歴史編纂に携わった陳寿は、蜀の滅亡後、晋に仕えた。この晋が魏から禪讓を受けて成立したという事情もあって『三国志』は魏を正統として書かれている。分量的にも全六十五巻の内訳は、魏書が三十巻、呉書二十巻、蜀書十五巻となっていて魏書が最も多い。その魏書のなかから華佗と曹操のつながりを描いた箇所を抜き出してみる。

『三国志』魏書・卷29⁽⁸⁾

- ③太祖聞きて佗を召す。佗常に左右に在り。太祖頭風に苦しみ、發する毎に心亂れ目眩む。佗鬲に鍼す。手に隨ひて差ゆ。
- ④後、太祖親ら理む。病を得て篤重なれば、佗をして専ら視しむ。佗曰く、此れ濟ふこと難きに近し。恆に政治を事とせば、歳月を延ばすべしと。
- ⑤佗久しく家に遠ければ、歸らんと思ふ。因りて曰く、當に家の書・方を得べし。暫く還らんと欲するのみと。家に到り、辭するに妻の病を以てす。太祖書を累ねて呼び、又郡縣に勅して發遣せしむ。佗能を恃み食事を厭ひ、猶ほ道に上らず。太祖大いに怒り、人をして往檢せしむ。若し妻信に病ならば小豆四十斛を賜ひ、寛く限日を假へ、若し其れ虚詐あらば、便ち収へて之を送れと。是に於て許の獄に傳付し、考驗するに首服す。荀彧謂ひて曰く、佗の術實に工なり。人命の懸る所なり。宜しく含み之を宥すべしと。太祖曰く、憂へざれ。天下に當に此の鼠輩無かるべけんやと。遂に佗を考竟す。佗死に臨み、一卷の書を出だし、獄吏に與へて曰く、此れ以て人を活かすべしと。吏法を畏れ受けず。佗も亦た彊ひず。火を索め之を焼く。
- ⑥佗の死後、太祖の頭風未だ除かれず。太祖曰く、佗は能く此を愈す。小人は吾が病を養ひ、以て自ら重んぜられんと欲す。然れども吾此の子を殺さずとも、亦た終に當に我の爲に此の根原を斷たざるべきのみと。
- ⑦後、愛子倉舒の病み困しむに及び、太祖歎きて曰く、吾華佗を殺ししを悔ゆ。此の兒をして彊死せしむるなりと。

『後漢書』も『三国志』も正史ではあるが、描写は各所に差異がある。歴史記述は畢竟、書き手のイメージのなかに映像化されたものであることを免れない。

曹操には持病があった。①には「積しく頭風眩に苦しむ」、③には「頭風に苦しみ、發する毎に心亂れ目眩む」とある。その持病は「頭風(眩)」と名が書かれている。激しい痛みが発作的に襲う、慢性の頭痛であり、脳腫瘍も含まれる。当時、後漢王朝はいまだ残存し、そこにさまざま

まな人々の野望が絡みつく。混迷する政界に働きかけて流れをととのえ、おさめ、おのれの納得のゆく〈政治世界〉を創り出そうとする〈治〉の営為が、曹操の人体に異状を引き起こす苛酷なものであったことは想像に難くない。「太祖親ら理む。病を得て篤重なれば、…」(④)とあるのは曹操が政治権力を握った頃から身体に変調が現れてきたことを示している。

「太祖聞きて佗を召す」(③)。誰がどういうつながりで華佗を連れてきたのか、正史には記載がないが、〈病〉を通して華佗と曹操は出会う。政治家・曹操にとって多様かつ多数の人材は必要であった。〈政治世界〉は一人では創造できない。まして、中国には春秋・戦国の世に諸子百家の人士たちが活躍した風土がある。曹操の周囲には当然のことながら各種の知識人・技術家が集まる。既に華佗は名医として名を馳せていた。仮に神医の医術というものがあれば、戦場で重傷を負った武将に神妙な治療を施して再起させ、戦場に復帰させることも可能である。華佗にはそれがある。だから華佗は何人もの武将、何万もの大軍に匹敵する価値がある。「佗常に左右に在り」(③)。曹操は華佗を持ち駒として握った。「佗をして専ら視しむ」(④)。華佗を専属の侍医とした。まずは曹操の「頭風(眩)」の治療が最優先であった。華佗はその期待に応える治験を示した。「佗鍼するに手に随ひて差ゆ」(①)。華佗の鍼治療によってそのつど曹操は回復したと記述されている。③には「佗鬲に鍼す。手に随ひて差ゆ」と治療部位の記載がある。「鬲」とは横隔膜と言われているが、定かではない。しかし、華佗の施術によって「頭風(眩)」は一時的にせよ鎮静する。曹操にとってこれほどありがたいことはない。華佗を侍医として重宝するようになった。秘蔵の宝である。自分と家族、あるいは麾下の武将たちの治療に専念するだけでよい。それ以外はしなくてよい。けれども華佗は曹操の「頭風(眩)」に完治の可能性は無いとみている。「佗曰く、此れ濟ふこと難きに近し。恆に政治を事とせば、歳月を延ばすべしと」(④)。〈政治世界〉の創造よりも病氣治療を優越させない限り、完治は無理との見立てである。〈病〉の根源の解決を初手から捨てている患者のそのつどの応急処置にだけ拘束される境遇に華佗は不満を持ち始める。華佗は自分の納得のゆく〈治療世界〉を構築したいのである。貧富・貴賤にかかわらず病める人を救いたいのである。特定の人々だけを助けたいのではない。かくて曹操の〈政治世界〉と華佗の〈治療世界〉に確執が生じることとなる。

「人と爲り性として意を得難きを惡み、且つ醫を以て業とせらるるを恥づ。又家を去りたれば歸らんと思ふ。乃ち操に就き還り方を取らんことを求め、因りて妻の疾に託して數期反らず」(②)。「佗久しく家に遠ければ、歸らんと思ふ。因りて曰く、當に家の書・方を得べし。暫く還らんと欲するのみと。家に到り、辭するに妻の病を以てす。數々期を乞ふも反らず」(④)。長く故郷を離れており、医書・処方箋を取りに帰りたいと曹操に願って帰郷するが、華佗には曹操のもとに戻る意思はない。妻の病気を理由に戻らない。曹操は幾度も催促をするが、華佗は休暇の延長を願うばかりで戻ろうとしない。「操書を累ねて之を呼び、又郡縣に敕して發遣せしむ。佗能を持み事を厭ひ、猶ほ至ることを肯ぜず」(②)。「太祖書を累ねて呼び、又郡縣に勅して發遣せしむ。佗能を持み食事を厭ひ、猶ほ道に上らず」(⑤)。「食事」とは食禄である。華佗には曹操の禄を食むつもりがない。

曹操の〈政治世界〉はやがては中華全体に及んでゆこうとするものであった。その延長線上には皇帝の位がある。言葉を換えれば、天子、つまりは天帝の子としてすべてを「おさめる」。そこに到達するには徳というものが必須である。だから、むやみと感情的な行動をすることは許さ

れない。命令に反抗する華佗を曹操は法的に冷静に処置しようとする。②には「操 大いに怒り人をして之をれん廉せしむ。妻の詐疾なるを知るや、乃ちとら収へて獄訊に付し、考驗するに首服す」とある。この部分、⑤では「太祖大いに怒り、人をして往檢せしむ。若し妻信まことに病ならば小豆四十斛を賜ひ、寛く限日を假へ、若し其れ虚詐あらば、便ちとら収へて之を送れと。是に於て許の獄に傳付し、考驗するに首服す」と詳しい。細かい法的手順を踏んでいることが描写されている。裏を返せばそれだけ曹操の怒りが激烈である証拠である。

ここに二つの正史はともに荀彧じゆんいつくを登場させる。荀彧は曹操の補佐を務める人物であり懐刀である。彼は華佗の命乞いをした。「佗の方術まこと實たくみに工なり。人命の懸る所なり。宜しく全容を加ふべし」(②)。⑤もほとんど同じである。曹操の〈政治世界〉にとって華佗の〈治療世界〉は欠かせないものであるから抹殺してはいけません、そういう主旨である。しかし曹操はこれを容れなかった。⑤には曹操の言葉が書かれている。心配せずともよい。これくらいのやつはごろごろいる。「憂へざれ。天下に當に此の鼠輩無かるべけんや」。曹操はみずからの〈政治世界〉の厳格さを世に示すために華佗の〈治療世界〉を握り潰したのであった。

華佗は死に臨んで書を遺そうとしたが、処罰を恐れた獄吏に受け取ってもらえなかった。それで華佗自身がこの書を焼き捨てた、と②にも⑤にもある。その書には華佗の〈治療世界〉の詳しい内容が書かれていたであろう。おそらく麻酔薬「麻沸散」の製法・用法も灰になったことは想像に難くない。

華佗の〈治療世界〉は曹操の〈政治世界〉によって押し潰された。そうではあるが、『三国志』にはまだその先の記述がある。「佗の死後、太祖の頭風未だ除かれず。太祖曰く、佗は能く此を愈いす」(⑥)。華佗を処刑したのち曹操はそれを後悔した。持病の「頭風(眩)」はまた起こるだろう。しかし彼の後悔は素直ではない。「小人は吾が病を養ひ、以て自ら重んぜられんと欲す。然れども吾此の子を殺さずとも、亦た終に當に我の爲に此の根原を斷たざるべきのみ」(⑥)。あいつはわしの治療をすることで重用されようとしていた。わしがあいつを殺さずにおいたとしても、わしの病気を根治できなかつたであろう。なんとも煮え切らない心情の吐露である。

しかしその次の記述は別のエピソードを紹介している。「後、愛子倉舒さうじよの病くるみ困しむに及び、太祖歎きて曰く、吾 華佗を殺ししを悔ゆ。此の兒をして彊死きやうしせしむるなりと」(⑦)。

曹操には二十五人の息子がいたとされているが、とりわけ聡明な曹沖あざな(字は倉舒)に期待をかけていた。その愛児が病気で危篤に陥った。華佗を殺したことが悔やまれる。この子をむぎむぎと死なせることになってしまった。そう言って嘆く曹操の心は痛恨そのものである。

曹操の〈政治世界〉と華佗の〈治療世界〉の接触に関して、『後漢書』と『三国志』の二つの正史とはかなり異なる描写をしているのが小説『三国志演義』である。その第七十八回、呉の孫権に斬られた蜀の関羽が、夜な夜な曹操の夢枕に立つようになる。曹操は厄祓いにと宮殿新築を思い立つ。その築材として選んだ樹齡数百年の梨の木がどうしても切れないとの報告にみずから出向いて剣を刺すところの神木から血が吹き出て満身に浴びる。それ以降、割れるような頭痛に苦しむ曹操に、重臣の華歆かきんが華佗を推薦する。招かれた華佗は曹操の脈を診たのち、頭部の切開手術を勧め、毒矢に当たった関羽の臂ひじも骨けぞを刮けずって治療したことを語る。しかし曹操は「臂と頭は比べものにならぬ。関羽とのよしみで復讐に來たのか」と怒り、華佗を牢に下す。そして華佗は

獄中で死ぬ。『三国志演義』ではかなり脚色が施されている。小説では、史実であるか否かよりも人々の心にどれだけ感銘を与えるかが重視される。それはそれで良いとして、曹操の〈政治世界〉が華佗の〈治療世界〉を押し潰したことは正史の二書に同じである。

けれども、一方が他方を破壊したというだけの理解でよいものであろうか。華佗も曹操も後漢末期から三国時代初期にかけての混沌の中を生き抜こうとした。だが、二人の生き様には大きな懸隔があった。華佗は人体内部の〈気〉の流れに働きかけて「ととのえる」=〈なおす〉ことを探究した。曹操は社会に働きかけて政治上の流通不全を改善すべく「ととのえる」=〈おさめる〉ことに挑戦した。〈治〉という文字には二重の意味（double meaning）があり、内部=人体を「なおす」ことよって外部=社会を「ととのえる」視角が〈治療世界〉の構築であり、先に外部=社会を「おさめる」ことよって内部=人体の安穩も「ととのえる」ことができるとする視角が〈政治世界〉の創造である。前者を実践したのが華佗、後者を実行したのが曹操。外見は華佗の〈治療世界〉が曹操の〈政治世界〉によって潰されたのではあるが、二つの異質なものの接触は単なる勝ち負けでは済まされない。⁹⁾ 華佗という一個人は殺されたが、その〈治療世界〉は未完成ではあったものの、その後の中国医学の歴史のなかで永遠に生き続けている。曹操は華佗を殺して生き残ったが、自身の「頭風（眩）」はその後も続いた。そして、貴重な人材としての名医を捨てた政治家は自分の有効手段を減らしてしまった。つまりは〈政治世界〉の〈病〉の因を新たに作ってしまった。曹操が志半ばで死去するのはそれからまもなくであった。

おわりに

華佗と曹操は同じ時期・同じ場所にこの世に生まれた。二人が互いの存在を意識することはなかったであろうが、無意識の接触を既に出生の時点でしていたと言えないこともない。それはともあれ、時間的にも空間的にも同じスタートを切った二人が、後漢末から三国時代初期にかけての社会の混乱にそれぞれ別種の働きかけをして流動する混沌を整序しようとした。そして華佗は〈治療世界〉の構築を、曹操は〈政治世界〉の創造をめざした。それだけであれば、この二つの世界にはそれほど重大な関係は生じなかったかも知れないが、〈病〉を媒介として接触をするに到ったのである。歴史のいたずらであろうか。結局、華佗は曹操によって殺されてしまった。さらにこの接触がもたらしたものはそれだけにとどまらず、華佗の〈治療世界〉は恒久の生命を持って中国医学史に残ることとなり、曹操の〈政治世界〉は政治上の新たな〈病〉を孕んでいったのである。

思えば、中国医学は陰と陽、臓と腑、気と血、營と衛、など二項の対立概念を用いて理論を組み立てている。この医学そのものが対照（コントラスト）の医学なのである。二つのものを対照し、相互の関係を観ることによって、それぞれがより明瞭に理解できる。本論文はそうした観点に立って、華佗の〈治療世界〉に曹操の〈政治世界〉を対照して考察してみたのである。

注

- (1) 華佗と曹操のかかわりを扱ったものとして既に、中田伸一、「曹操と華佗」、『小山工業高等専門学校紀要』、32、2000年3月がある。この論考から多くの示唆を得た。

- (2) 『三国志』魏書・武帝紀・卷1に引く孫盛『異同雜語』に、太祖・曹操自身が人物評論家の許劭きょしょう(字は子將)にみずからの評価を尋ねた話が記載されている。「(太祖)嘗て許子將に問ふ。我は如何なる人かと。…(中略)…子將曰く、子は治世の能臣、亂世の姦雄なりと」。このことから後世、曹操の評として言われるようになったのである。
- (3) 藤堂明保編、『漢和大事典』、学習研究社、などによる。
- (4) 中国医学の発生事情については、加納喜光、『中国医学の誕生』、東京大学出版会、1987年5月、また、山田慶児、『中国医学はいかにつくられたか』、岩波新書、1999年1月、及び、同、『中国医学の起源』、岩波書店、1999年7月などがまとまっていて読みやすい。
- (5) 地域としての徐州は、前漢の武帝が全国を十三州に分けた際に置かれた州で、現在の江蘇省の長江以北から山東省南東部にかけての広い領域であった。また、都市としての徐州は現在の江蘇省徐州市にあたる。
- (6) 西晋・華嶠かきょう『後漢書』、西晋・司馬彪『統漢書』、東晋・謝沈『後漢書』、東晋・袁崧えんそう『後漢書』、東晋・張璠ちやうはん『後漢紀』、東晋・袁宏『後漢紀』などがあるが、そのほとんどは現存していない。
- (7) 清・王先謙の『後漢書集解』卷82下による。『二十五史』芸文印書館のものに各種版本によって校勘を加え、表記の差異を調整して用いる。
- (8) 『三国志』台湾中華書局のものを主として使い、各種版本により校勘を加える。
- (9) 中国で製作された『華佗与曹操：三国志外伝』(黄祖模导演、上海电影制片厂、1983年)という映画がある。政敵・袁紹との戦いのさなか、猛烈な頭痛に倒れ病床に就く曹操。参謀の荀彧じゆんいくが親友の華佗を連れて来る。激しい痛みも華佗のひと鍼によって拭ったように消え、曹操は華佗を気に入り軍医にする。一方の華佗は一政治家の侍医になるために医術の腕を磨いたわけではない。城砦の外に首を長くして待つ患者たちを診ようと外出するにも足止めをくらって自由に医療活動ができない。曹操は華北のみならず中国の統一支配を目指す。自分の命令に逆らう者の存在は許せない。こうして曹操と華佗の心情の齟齬、対立が膨らんでゆく。華佗は妻の病気を理由に許可をもらい帰郷するが、大衆への施療と麻酔薬の開発に没頭する。苦心の末、麻酔薬＝「麻沸散」は完成するが、曹操のもとへ強制的に連れ戻される。曹操にも心理の葛藤があるが、決して謝罪しようとなし華佗の態度に斬首を執行する。これが大筋である。映画の中、華佗は薬草を採りに出かけた山で、幼い息子・沸兒へいじ(華沸)が毒の実を口にして落命してしまう。そのため「麻沸散」の命名はこの愛児の名に因む。また、曹操にも眼の中に入れても痛くないほど可愛がっていた幼い息子・沖兒ちゆうじ(曹沖)がいた。しかし、沖兒が発病する。そして華佗の治療が必要になるが、その時は既に華佗の処刑を命じたあとであった。処刑の撤回を指示するが、もはや間に合わない。「私が息子を殺してしまった」と絶叫する曹操の悲壮な姿が闇のなかに消えて映画は終わる。華佗と曹操の関係をめぐるひとつの解釈として興味深い作品である。